

■■ 山林は日本の力 ■■

< I >

戦時中、日本の実力を誇る標語に「見たか戦果、知ったか底力」というのがあった。たんに標語としてはたしかに秀逸と言えようが、さて内容に思いをいたすと、いささかこそばゆい。顧みて他を言う侘しさが無いでもない。底力と言うかぎり「腐っても鯛」などの比喩にも通じる潜在的な持前の力——特質——と解せられるが、われわれとして真に内外に誇り得るものと言え、物質的にはやはり山林あたりではなかろうか——とそんなことをある雑誌に書いたことがあった。

なにぶん未墾地が国土の八五%もあり、その大部分が山である事実を顧みると、底力をそこに求めることは、あるいは妥当かも知れぬ。その山も戦時中から戦後にかけて、伐採に次ぐ伐採で、眼に見えて淋しくなり、とうとう過般の保護法の公布とまでなったわけだが、今にしてなお保護の対象になり得ることは、たしかに底力であるには違いない。それにしてもあの終戦当時の、あらゆる物質に事欠いた惨めな状態を想起すると、よくもここまで立ち直ったもので、私などはこれも一に山林があったればこそと、ひそかに思っている。

日本人の大部分、ことにいわゆるインテリ層などは、戦後アメリカの援助のみが、よく日本の危機を救い得たと思うかも知れぬ。もちろん、アメリカの援助は偉大であったが、それだからとて、物言わぬ山林の恩恵を無視できるであろうか——。もっともそれを言おうには、国民生活上、当時何が最も欠乏し、重要であったかを、十分に認識する必要がある。それにしても、当時食料について、食塩がどの程度にまで欠如していたかは、正確に把握できぬとしても、最後の線に達していた事実だけは否み得ない。輸入はもちろん、塩田そのものもまったく機能を失っていた。それで国中の海岸線一帯に、古風な塩釜を据えて、塩焚きをやっていたのだが、あの時日本の山々が、かりに朝鮮や中国のように、赤禿であったらと想うと、まさに冷汗三寸の思いがする。見方によると、日本人が山の木を齧って、辛うじて最低限度の塩分の補給をつづけたとも言われよう。その上に石炭の代用も電力の不足も、山林の伐採によってのみ凌いできたのである。

その後六三制の実施に伴う校舎の増築に、村や町が昔ながらの氏神の森や共有の山林を伐って、辛うじて国の方針に沿い得たのも忘れない。近くは朝鮮戦争に伴う特需で、日本経済に貢献した事実は明白であるが、これまた、山林資源に負うところが大きい。

< II >

古来、日本人の山林に対する関心は、決してたかいものではなかった。試みに、文学や口碑伝説に現れた事実でも、山岳に対する感懐は深い、こと一度山林になると、ほとんど問題にならない。見事な森林はそちこちにあったにかかわらず、その神秘や幽玄を取り扱ったものも、美しさを讃えたものもありはしない。

一方、山岳に対する感懐も、実は原始思想に基づく別個の世界としてで、その範疇から何程もでてはいない。それは要するに、神の国であり、伝説のいわゆる他界であった。したがって実生活の上では、一部分、山を職場とする人々の領域に委せて、たまたま交渉をもつとしても、極めて認識は低い。その一例として、古く山の狩人を山達と言ったが、平地や都会では、もっぱら盗賊の名で記憶せられていた。のみならず、江戸時代の絵画や歌舞伎にでてくる山寨の主や強盗が、故実家は何と説明するかしらぬが、ことごとく狩人でなくばいわゆる山稼ぎの人々の服装をしている。それこれ思うと、それらの人々を、山に生活する点で、あたかも正当な職業者でないかに見ていたとも言えよう。そうして山の奥には、未だ平地では想像もできぬ世界の存在を信じようとする感情がある。いわゆる山窩などが現代人に案外人気があるのもその表れで、一面ゆかしいところもあるが、それだけ山に対する認識の不足を暴露している。山に対する関心がその程度だから山林となると一段甚だしいものがある、くり返すようだが、文学や美術にも山林の美しさ等取り扱ったのは、近代のものを別にして、絶無といっても過言でない。

<Ⅲ>

国土の風景なども、千年も前から山島国の名で呼ばれてきただけに、山が基本的な要素で、南部ロシア等の草原にも対比すべきものであるが、あらゆる面に関心がうすい。だから、山または山林が、時代的にどういふ変遷を辿ったかについても、極めて呑気で、昔はただ、うっそうとしていたのが、伐採に伐採を重ねて、その結果、水害が頻々と起こるに至ったくらいに思っている。実は現在の森林保護法や治水対策をめぐる施策にも、そうした解釈を基点とするかに考えられる節がある。もっとも原始林が次第に影をひそめ、古木が次々に伐られた事実は認めるが、昔は一概に大森林をもって覆われていたとは断じがたい。

われわれの国の山の、ことに大部分の山相は、ここ半世紀または四分の三世紀の間に、著しい変化を見ている。それ以前は、里近い地域の山は、特別のものを除く以外は、ほとんど木はなかった。それはあたかも奈良の若草山のように、草生の連続で、いわゆる刈敷山であった。これは化学肥料のほとんどなかった時代の、稲作肥料が何であったかを考え

れば自明である。更に風景としては、古い大和絵を想像するのが手近で、山は一面に淡緑または黄土色で塗りつぶされ、ところどころに面白い枝振りや、恰好も松杉が立っていた。

九州の背振山や豊後の奥地などでは、楊桃^{やまもも}なども混ざっていた。あるいは特に、合歡木を仕立てたのもあり、草生には萩、薄、女郎花、かるかや、笹などが多く繁っていた。三河と信濃の国境桧原山の一带など、女郎花ばかりの山もあり、また秋田、山形などでは、萩がことごとくの山肌を埋めていたりした。

こうした景観が、明治初期の部落有林野の統合、整理を契機に一方水田肥料の改革も伴って、自然に雑木の繁るに任せ、その他では植林を行った結果が、現在のように黒々とした林地になったのである。この大きな事実を目を掩うて、近代ほど山に樹がなくなったように言うのは間違いである。しかしなにぶん、需要が多いために、全体としては木が少なくなり、山陽地方の山のように、テッペンから禿げて、救い難い状態の地域も生じたのである。

洪水禍が山の荒廃と関連するのは事実だが、元来雨の多い国だから、以前とてもしばしばあり、その惨事も少ないものではなかった。悪質の洪水が、白髪水または鉄砲水等の名で記憶され、河川の堤防を繞って、白髯神社が至るところに祀られたのも、その因縁を語っている。問題は凶作と同じで、大昔から繰り返されたのだが、政治的に問題になったのは、徳川も中期以降であったのと同じである。

<IV>

濫伐はもちろんほむべきことではないが、前にも言うように、文化の向上や工業の異常な発展を受けて、需要があまりにも多かったのである。日本が近代国家建設に際して、一部の輸入はあったが、木材に対して何ら苦勞せずすんだのも、正に山林の恩恵であったのだが、国民がその点に気づかなかつたにすぎない。それを一度洪水禍があると、ことごとく濫伐の仕業にきめて、山には十分理解があるはずの国有林当局などまで、国民の無理解のように言うのはおかしい。そうして、今更のように治山、治水の急務を説き、選挙のスローガンに掲げる人物も少なくない。その他、自然の災害を予算獲得の具に利用し、台風をあてこんで、橋梁や堤防を故意に毀す役人などまで出て、樹を伐った罪悪のみが宣伝され、功績については一向に触れるところがない。

いわゆる濫伐の非難に対して、特に反省を喚びたいのは、稲の生産との関係である。東北の冷涼地帯などでは、四周の山林が伐られたればこそ、稲の生産が可能になったので、以前はどこへいっても」、盆地の中央部だけしか稲は作れず、山沿いの殆どは稗田であつ

た。農事試験場関係の人々など、冷涼地に稲作が可能になったのは、ただひとつ、耐寒品種の普及、いわば自分たちの研究の成果と思うかもしれぬが、反面山林伐採による自然的条件の更新も大いにあずかっただろう。それというのが、以前は山間部等では、上位の田を犠牲にして石をならべ、気温の上昇を図ったのだ。現今その種装置がまったくなくなったのは、代わるべき方法が、発見されたからではない。

<V>

日本は今四つの島などと言って、土地資源の貧困を嘆くが、大部分が山林である実状から見て、これをいかに開発利用するか、将来の命運がかけられている。いたずらに他国の富や資源に羨望を繰り返すべきでない。しかも開発利用に当って、山を Teppen から引はぐばかりが能でない。それかと言って、植林だけが知恵のある策ではなかろう。過去の刈敷山の事実を鑑みても、一部分は牧野として、造成を図ることも要素である。それこれ考えた場合、国土経営について、この際、根本的に総合計画を樹立する必要がある。その達成には、官民地を通じて、所有関係に一大改革行うことも、覚悟せねばならない。

山の経営に、植林はもちろん重要事項であるが、学徒動員や緑の羽運動に、充分反省を加えること、実質的には民間の知識を大いに吸収する。日本には幸い各地に山狂いと言われるほど、山林経営に練達の士がある。それと同時に多数の国民に山との利害関係を持たせ、希望を与える方策を進めること。そうして一部の者の独占を排除する。具体案として、部落または共同組合単位に、共通林野を持たせ、共同の経営を図ることだ。

琉球は山林資源が乏しいだけ、その育成保護に、並々ならぬ苦心をしたことは、旧琉球政府の山式法張や村内法の条文にもよく窺われる。その中で盗伐防止の科松の制度など、如何にも实际的で、一本の盗伐に対し、罪料として数十本を植えさせる。この制度などそのままの応用は無理だが、精神にはわれわれ他山の石とすべきものがある。これから思い出すのは、われわれの祖先の伐木に対する観念で、木を伐った場合はかならずつぐないに代木を植え継ぐ。いわゆる名木の類に後の植継ぎが多かったのもその関係で、古語のつぎねうというのはけだしそれで、後には木を植えることと解釈もされたが、本義はつぐのいで、これがわれわれの植林史の最初の頁である。したがって、樹を伐って後の植林を怠ることは、道徳的に罪科を意味したのである。

<VI>

山林の保護には、植林育成の一方に、消費の規制があり、ことに現在のように需要が旺

んになると、いちだん急務を感ずる。あのいろりで焚く裸火ぐらい不経済なものはない。しかも貴重な燃料の濫費をあえてしながら、いずれかという、冬分など寒々としているのが、農村の実情である。東北の米作地帯などで、とくにその感が強い。いろりだけは大きい、薪は至って乏しい。藁や靱がらを焚いて、子供などふるえているのは悲しい。その点長野県などで食事も炬燵に入って摂るなどは、無条件に賛成出来ぬが、当面を救う上には意義がある。

消費規制でもう一つ言いたいのは建築様式である。これも爐の裸火同様、見過ごされているが、日本の農村建築は、山におびただしく木があった時代の風を、そのまま継承しているが、朝鮮や中国のように、土の利用が忘れられている。この傾向は、東日本に特に顕著で、東京以東では、家に土壁がまったくないといっても過言でない。いわゆる奥羽六県等では土壁と言うと土蔵か、さもなくば地主階層の座敷の床の間と、長押の上部に限られていて、それ以外はことごとく板壁である。二、三年前、栃木県那須地方で聞いたところでは、採算上土壁は板壁に較べて遥かに高値である。したがって左官職が、都会地でもないといないのである。板壁も部厚い材を二重張りにでもすれば別だが、隙間が多く冬季の保温には、到底土壁には及ばない事実に見ても、これが濫費でなくて何であろう。

こうした不合理が見のがされていたのも、お互いが外にばかり関心を奪われて、自分たちの生活文化に関する認識の欠如からきている。山林の濫伐は口にするが、自分の濫費方は忘れて、どこかの悪徳漢の行為ぐらいに呑気に考えている。それにしてもわれわれはもっと事態を真剣に見つめて、次の対策を考え、この国の山林のもつ意義を、もっと培うべき義務を痛感せざるをえない。